

長崎眼鏡橋

Bridges of the World

長崎県・長崎市



日本・2012年発行

長崎を訪れる多くの人が目にする中島川の眼鏡橋は、長崎・興福寺の住持にもなった中国人僧・如定（によじょう）によって寛永11年（1634）に初めて架けられたとされています。これが日本の石造アーチ橋のルーツになりました。ただ、建設に携わった技術者の名前などは伝えられていません。

江戸幕府は寛永10年（1633）に鎖国を決め、長崎に出島を築いて西欧との通商をオランダ一国に制限しました。一方、明との通商は活発で、多くの中国人が長崎に居住していたようです。当時の中国では北方民族の清が勢力を拡大し、遂に1644年には明王朝は滅亡しますが、亡命先として長崎を選ぶ人が多くいました。中国人の僧が主導して眼鏡橋が架けられたのは、このような時代背景と無関係ではないでしょう。

眼鏡橋の規模は、長さ約23m、全幅4.7m、純径間がおよそ8.2mの2連アーチで、ほぼ半円形のアーチが適用されています。構造を支えるアーチ石には厚さが60cm弱の石が並べられています。石材は安山岩で、石の接合に漆

喰が使われているため、メリハリのある外観を作っています。2連アーチが川面に影を落とす姿から眼鏡橋と呼ばれるようになりました。その後に中島川に架けられた橋は全て単一のアーチから成っており、眼鏡橋だけが異質です。中島川のような鉄砲水が出易い川で、あえて橋脚を建てて流水抵抗の大きい形式を選んだのは、日本で初めての試みでもあり、単一のアーチにするには技術的な自信が持てなかったためであると推測されます。

昭和57年（1982）7月、長崎地方を襲った記録的な豪雨によって濁流が中島川の堤防を越え、周辺の民家を押し流しました。石橋がダムようになって川の流れを堰き止めたため被害が大きくなったとも言われました。また石橋も6橋が崩壊しました。眼鏡橋と下流の袋町橋は高欄などが破壊されましたが、本体のアーチ部は何とか持ちこたえました。洪水後、石橋の全面撤去も検討されましたが、石橋を残すべしという内外の声に支えられて、眼鏡橋や袋町橋付近にバイパス河道を造ることによって橋を残す案が作られ、元の姿に復元されました。



撮影：松村 博